



日本記者クラブ
記者研修会
「原子カムラのいま」

3.11 後のフクシマは どう変わり、どう変わらなかったか？

開沼博 福島大学特任研究員

2012年8月30日

あの3.11から1年5カ月余。地震と津波、そして、被曝という三重苦にあえぐ福島はその後どうなったのか。「フクシマ論」で、受け身の被害者としての福島ではなく、むしろ過疎対策として積極的に原発を取りに行った「原子カムラ」としてのフクシマを描いた開沼博さんにその後の現地の状況をレポートしてもらった。開沼さんは3.11前と比べた変化について細かく分析しながらも、その後福島を含めた原発立地自治体での選挙結果がかならずしも脱原発となっていない、いわゆる「4.10」問題を例示、本質的に変わらざるものがある、との指摘をした。そのうえで、開沼氏は、今後重要なことは被災地の変化をデータでじっくり見ていくことだとし、そういう眼差しをもって接していくのが重要だと述べた。

司会：倉重篤郎 日本記者クラブ企画委員（毎日新聞論説委員長）

日本記者クラブ Youtube チャンネル

<http://www.youtube.com/watch?v=RN6GHD8Yx1k&feature=plcp>

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会：倉重篤郎・企画委員（毎日新聞論説委員長） 日本記者クラブの第15回目の記者研修会の最初の講演でありますオープニング講演、開沼博さんにさせていただきます。

今回の研修会には、全国の68の新聞・テレビ会社から99人の、現場、一線で活躍されている方が研修生としてお見えになっています。プラス、通常の日本記者クラブの一般会員の方が50人、トータルで約150人の方をお迎えして、最初の講演をしていただきたいと思います。

開沼さんは、話題になっている『「フクシマ」論 原子カムラはなぜ生まれたのか』の出版後去年10月にこちらに来ていただき、お話をさせていただきました。きょうは、それから10カ月たっております。あのときは、ともかく原発のこの事態をどうみたらいいのか、なぜこういうことが起きたのかといういろんな問いの中に、開沼さんの1つの視点、キーワードを申しあげると、「自発的な服従」という言葉がありました。中央と地方の2つの原子カムラがあって、その相互作用の中で、戦後の経済発展の中で、こういったものが必然的に生まれてきた、ということを見事に解明された本だと思いました。

きょうは、3.11から1年5カ月がたちまして、その後の原子カムラの現状をお話しいただきたいとお願いをして来ていただきました。非常に難しいテーマだと思います。開沼さんの書いていらっしゃる幾つかの雑誌を読みますと、いわゆる原発を挟んで広がる南北格差、南北問題という新たな視点を打ち出されて分析されております。きょうは、それ以上に詳しい話をお聞きできると思います。

大体40～50分お話しください後に、皆さん、特に若い方からたくさん質疑を受けたいと思います。私は、きょう司会をさせていただく企画委員の倉重と申します。では、開沼さん、よろしくお祈りします。

震災後のフクシマ語りたい

開沼博・福島大学特任研究員 昨年も、いまご紹介いただきましたとおり、こちらでお話しさせていただきました。昨年、来ていただいた方は、きょうはたぶん来られていないと思いますので、ところどころ、いまご紹介いただいたような、2つの原子カムラとか、そこら辺もおさらいしながら話を進めていければと思います。

自己紹介から入りたいと思います。昨年も全く同じことを申しあげましたが、私はアカデ

ミズムの人間ですので、本当に現場で取材をされている、記事を書かれている方々を前に、非常に恐縮です。至らぬ点があるかと思いますが、その点、ご容赦いただければと思います。いまの福島状況について、お話しさせていただければと思っております。

自己紹介は、大体資料に書いてあるとおりの経緯でございます。いろいろ本を4つほど並べていただきますけれども、一番左側が『「フクシマ」論』という本です。これは私が2006年から、福島原発立地地域を歩いて、史料の研究も含めて、大きく言えば明治以来、主に戦後の原発がなぜ福島の地域に立地したのかということ进行分析しながら、日本の戦後とは何だったのかということを考えている本です。

その隣が、『地方の論理』。佐藤栄佐久さんは元福島県知事です。彼が実は2000年代の頭に一度、原発を、それまで推進側というか、容認側の立場だったところから脱原発、脱というかその当時はずっとあえて原発を受け入れていたところを、無条件にはできないよというような方向転換に、大きくかじを切ったわけですが、その背景に、たぶん原発だけじゃない、さまざまな地方自治についての思想があるのではないかと、ということをおーラルヒストリーとして聞き取ったものです。

あと、『「原発避難」論』。これは共編著なんですけれども、実際、原発の事故が起こってから避難した方がどういう状況にあるのか、というような話。

ご承知の方が多いと思いますが、民間事故調の報告書。これの9章の原案を私が担当してたりもします。

というように、震災前は過去を振り返る作業でしたけれども、震災後は現在、近い過去を振り返るという作業をしなければならぬ状況になっておりました。ですので、前回お話しさせていただいたときの何倍も、きょうのお話は難しいなというふうにも思っております。さまざまな観点からこのことは語り得ますし、その語り方がどれだけ難しいのかというのがきょうのテーマにもなってくるかというふうにも思っております。

『「フクシマ」論』の簡単なご紹介は、先ほどお話ししたとおりです。そこで、重要なのは、日本の地方、中央の関係ということですね。原発の話を通して、私は何をしたかったか、原発、原子力の話をしたかったわけでは必ずしもない。原発の話ではもちろんあるわけですが、たぶんそうではないのではないかと。この問題を問うこ

とによって、例えば米軍基地の問題、あるいはダムの問題、空港の問題、さまざまな迷惑施設の問題、そういったものが実は地方に置かれていて、地方に置かれながら日本の戦後、経済成長が達成されてきた、その背景にある、原発だけにとどまらない大きなメカニズムをみていきたいという思いがありました。そして、たぶんいままもそういった問題意識でこの原発事故をみていく必要があるということを考えています。

原発の議論というのは、なかなか技術論とか、あるいは自然エネルギーの話とか、放射線の被曝の話とか、どうしても理系っぽい話になってしまいます。あるいは、エネルギー政策をどうするか、原子力の規制をどうする、というようなお上の話になってしまったり、そして必然的に専門性がある話、あるいは各論になってしまう。当然そういった視点が必要だし、そうならざるを得ない議論なわけですが、できるだけそれを文系に、ミクロに、もうちょっと一般性を持たせながら、総論から原発のことを考えていこう、ということをおの本では試みましたし、いままもそういった視点で研究を続けているというような状況です。

『「フクシマ」論』については去年の10月17日の日本記者クラブのYouTubeチャンネルで見れますので、詳細はこちらをご参考にいただければと思います。

忘却のループに陥る原子力村

ポイントを申します。『「フクシマ」論』の表紙にもこれは書いてあるのです。ちょっと文言は違うかもしれませんが、ざっくり言うところのことです。「3.11を経ても社会の根底にあるものは何も変わっていない」というのが私の1つのテーゼです。それはどういうことかということをおこれからご説明します。

2つあって、1つはみずから原子力を求めにくる原発立地地域の状況。それは先ほども出た「2つの原子カムラ」と呼ぶもの、そういったモデルでみていくことによって、1つわかりやすくなるのではないかと。もう1つは、「忘却のループ」。

きょうは、「原子カムラのいま」ということで話をしてくれというふうに依頼いただきました。「原子カムラ」というのは非常に曖昧な言葉です。その定義から始めてまいりたいと思っています。

いわゆる原子カムラというと、自然エネルギーの専門家の飯田哲也さんとか、いろんなところでおっしゃっているような、原子力行政とか原子力産業、原子力業界みたいなものを一般的に指すわ

けです。私の場合は、ダブルミーニング (Double meaning) です。そういった意味もある。それは「中央の原子カムラ」とここで呼んでいるものです。

もう一方に、地方の原子カムラと呼べるものもあるのではないかと。ということです。

なぜ2つの意味を「原子カムラ」という言葉に持たせたのかということですが、それは、2つの原子カムラモデルというものをよりわかりやすく、覚えてもらいやすくとらえるために考え出したことです。

簡単に説明してまいります。日本社会がいかに原発を抱え、維持してきたのかというのは、この「二つの原子カムラ」モデルというもので考えるとわかりますよ、ということです。それは中央と地方に存在する。1つはご承知のお話ですけども、原発を置きたい側、置き続けたい側とはどういうアクターなんだろう。原子力行政とか原子力産業 (電力会社・メーカー) です。あるいは、これは異論、反論いろいろあると思います、あるいは原子力行政の方も産業の方も、そんな一筋縄ではないよとおっしゃるかと思えますけれども、メディアもそこに加担してきた部分も、もちろんアカデミズムもそうです。そういった、原発というのを何となく素晴らしいものだとして戦後社会は始まってしまった。そして、その理想への邁進の果てに、どこかで合理性がゆがめられていってしまうという状況があったのではないかと。「ムラ」という言葉を使っていますけれども、どこか内向的で閉鎖的である。合理性よりも伝統とか秩序を求めていく、というような意味を込めて「ムラ」というふうに申しております。

もう一方が、「地方の原子カムラ」と呼べるもの。これは、逆に原発を置かれたい側、置かれ続けたい側です。置かれたい、置かれ続けたいという、自発的なニュアンスが入ってまいります。置かれてしまうと、嫌々置かれるという感じでは、どちらかというとなし。

それはどういうことか。これは『「フクシマ」論』にかなり詳しく、400ページかけて書いているテーマですので、なかなか一言では言えないのですが、要は「原子力依存症」状態になってしまうような状況にある地方のことです。

この2つが共鳴する中で、原発というのが維持されてきたし、逆に、この2つのアクター以外には、なかなか原発というものに触れられない、そういった中で原発が維持されてきてしまった、ということをお分析しております。

では、もう少し具体的な話に落としましょう。先ほども申しました「3.11 で日本は変わったのか」という問いに答える形で、地方の原子力ムラがどういうものかということを示します。3.11 がありました。「4.10」と私は呼んでいますが、3.11 から1カ月たとうとする日、このときに新潟県の柏崎刈羽原発がある地域、まさにそのままそこは選挙区になったわけですが、県議選で脱原発を掲げる候補と、維持あるいは容認する候補が戦った。その結果がこの数字なわけです。

(新潟県議選・柏崎市刈羽郡選挙区 2011年4月10日)

○東山英機 66 男 自民党 現 18280 維持
○三富佳一 72 男 自民党 現 16644 維持
×武本和幸 61 男 無所属 新 14886 脱原発
開沼氏の資料より抜粋)

まだ事故は進行しています。柏崎刈羽、ご承知の方が多いいと思いますけれども、中越沖地震のときに、敷地内で、原子炉ではないですが、火災が起きたりしている。そういった記憶もまだ生々しい中で、何でこういう結果になるのかということです。いま変わらないものが、いつ変わるのか、というふうに私自身も、あるいはこの事実を知った人は、この4月10日の時点で思ってしまったのかもしれない。

3.11 後も民主的に原発を選択

このとき、中央のメディアや、あるいはいろんな言論を発する方は、線量とか被曝の話、あるいは行政、電力会社の問題とか、脱原発の動きだとか、いろんな話をしていましたけれども、ただ、それは、原発立地地域ではどういう雰囲気なのか、必ずしも日本の空気として、私たちは東京のメディアで、あるいは知識人がしゃべっているようなことをとらえてしまうけれども、実は原発のお膝元に行ってみたら、全然空気が違うのではないかと思います。そして、たぶんこれが震災前からずっとあったからこそ、どこかで合理性とか安全性がねじ曲げられたような原発というものを日本が抱えてきてしまったのではないかと思います。

具体的な話をもうちょっと詰めていきますと、私はこの4月10日に新潟に行っていました。というのは、新潟に避難している方が非常に多かったのです。新潟で御飯を食べようと入った喫茶店では、「原子力つけめん」とか出てくるわけですね。これは、当時、日本全体の空気としては、

「自粛」とか「不謹慎」というような言葉が飛び交っていたわけけれども、余りにも強固な秩序、原発を維持するという動きがあったのではないかと思います。そして、それは言ってしまうと、民主的に原子力を再選択していくというプロセスがここにあったわけです。

そして、さらに言うと、その後の原発立地自治体の選挙結果はどうでしょう。直近では、山口県知事選に、飯田哲也さんが出ましたけれども、敗北する。あるいはその前にも鹿児島県知事選がありました。北陸のいくつかの自治体でも選挙があって、あるいは議会の中で再稼働についての立場を表明するような決議がなされたりした。あるいは北海道にも泊原発があります。その界限でも同じようなことがあった。山口県の上関町、これはまだ原発ができていないところですが、ここでも選挙があると、どういう結果になったか。やはり「脱原発」と東京では言われているけれども、その地域に行ってみると、必ずしもそういう雰囲気でもないらしいということがあつた。3.11 以後も民主的に原発、原子力を選択していくようなプロセスがあるという話です。

ちなみにですけれども、3.11 間際の福島の風景というのも、またこういったものでした。先ほど、原子力に依存的であるというふうに申しました。さまざまところ、原発の麻薬性、中毒性というような形で報道がされていますので、改めて細かく申すことでもないかもしれませんが、多くの町の駅に行くと、「原子力最中」という最中が売っている。富岡町の国道沿いには「アトム」というお寿司屋があり、右側の写真はちょっとわかりにくいですが、これは海で、そこに釣り人がいるのです。釣り人の奥にフェンスみたいなものがある。この奥に何があるかという、原発の取水口、排水口があるわけです。地元の人が釣りをしている。本当はこの近くに行くと、「釣り禁止」、「立入禁止」というふうに書いてあるんだけど、地元の釣り屋さんに行くと、ここはよく魚が釣れるよと言われていて、地元の人にはいい釣りスポットというふうに認知されているのです。排水口から温かいお湯が出て、プランクトンが集まってきて、魚がいっぱい集まってきて、大きな魚がとれるという話です。これを聞くと、外の人からしたら非常におぞましい話かもしれませんが、しかし、地元の人にとっては、生まれたときからこういうものがあり、身近なものとして原子力がある。私は「原子力を抱擁する社会」と表現しております。

背景に、いろいろ話はあるのですけれども、原

子力とともによくも悪くも歩んできた、歩んでこざるを得なかったような戦後があり、このような風景があった。それはもちろん常に意識されるものではなく、むしろ無意識の領域にあったものかもしれないけれども、これが、日本が成長する背景にあったということを考えながら、原発の問題をとらえていく必要があるのではないか、ということをおっしゃっています。

「3.11で社会と原発の関係は変わったのか？」というふうに問うておられます。この2つの原子力ムラの構造は変わったのかということです。もちろん、政局的な町、ニュースの話、世論調査の話では、いろいろ変わっている。国民の原発に対する態度がどうだとか、あるいは原子力の行政がどうだとか、関係する産業がどうだという話はいろいろされていますけれども、私の答えは、少なくとも現在までは変わっていないのではないか、ということです。

途上国では原発ニーズが増え

対内的にみてみますと、行政とか財界の姿勢はどうか。もちろんいろんな発言にぶれはあります。基本的には、政治家の方は状況によって変わったりもします、立場によって変わったりもします。しかし、行政や財界の姿勢というのは、実は一貫している、というふうに読み取れるのではないかということです。

地方、これはいま説明してきたとおりです。「自ら原子力を求めにいく」ような態度というのは、事実として変わっていない。そのよしあしは別にして、このような対外的な状況がある。

では、グローバルにみたらどうかという話になりますけれども、輸出産業としての原発としては、まだまだ日本から海外に持っていく話はある。その背景に何があるかといえば、新興国、途上国にとっての原発の重要性は、3.11を経ても、あるいは3.11を経た後、なおさら加速しているようにもみえるところすらあります。ドイツやイタリアが脱原発にかじを切ったという話がありますけれども、もちろん一部新興国、これは数日前にどこかのニュースで見たのですが、タイとか、原発はあまりよくないよというような話が出ているというニュースをみましたけれども、そういった一部を除けば、基本的には原発を維持する、むしろ原発推進を活性化させる、そういう動きすら出ているというふうに言えるかもしれません。中国もそうですし、アメリカもそうですし、あるいはフランスも揺るいでいない。また、さまざまな新

興国もそのような状況にあるわけです。

だからといって、この事実を是認するという話ではもちろんありませんが、たぶんこういった現状が、なぜこうなっているのか、まずそういった事実認識からみていく必要があるのかなと思っております。

どうやらこの「2つの原子力ムラ」という構造は変わっていないらしいと言えるのかなということですね。

次は、「忘却のループ」というふうに呼んでいます。前回の会見でも結構しゃべっていますけれども、結局、原発というのはどういう構造の中で今回の事故に至ったか、いろんな説明の仕方があると思います。私は、忘却のループの中で至った、というふうに答えることができていると思っています。79年スリーマイル島の事故があり、86年チェルノブイリがあり、99年にJCOがあった。10年単位でみると、7、8、9で、0はあまりなかったかもしれませんが、2011年に福島ということになってしまいました。

結局、その都度、例えば反原発、脱原発の声というのは盛り上がるわけです。ジャーナリズムもアカデミズムも、この原発をどうしようと。それは技術的な側面もそうですし、社会的な側面でも、文化的な側面でも起きてくる。しかし、ある程度時間が過ぎると、そのような問題は置き去りにされてしまう、忘却されてしまう、ということです。

3.11 間際の、あの昼までの状況を思い出してみれば——思い出すことすら難しいかもしれませんが、多くの方が無意識的であったとしても、「原子力カルネッサンス」だとか、「CO₂削減に役立つエコな原子力」みたいな話を、知らないうちに耳にしていたのかもしれませんが、そんな中で事故が起こってしまった。

たぶん、重要なのは、社会的に一時的に問題がバーッと指摘されるということがあるわけです。よく、原発のことを追いかけている方はおっしゃいますけれども、いま出ているような問題設定などというものは、80年代、あるいは70年代から言われていたことが、再度繰り返されているだけだ、みたいなことも言われます。実際、いまいろんなところで発言している方も、80年代にチェルノブイリのときに発言している方が、もう一度リバイバルしてしゃべっているような状況があるのかもしれませんが。

問題が洗い出されるということはもちろんいいのですが、そこからどこかで忘却してしまうのではないか。これをいかに繰り返さ

ないかということを考えていく必要があるのかなというふうに思っております。

少し話がずれますけれども、3.11 直後と現在の差というふうになると、何がこの1年で起こったのか。それはたぶん課題整理であると言えるのではないかと思います。

3.11 直後は、あるいは去年のいまごろでもそうだったかもしれません、この問題をどこから手をつけていいのか、という状況があった。混沌があったかもしれません。しかし、現在、だんだんその混沌が解消されてきているようにも思います。除染、補償、瓦れきの話、あるいは事故の検証みたいなことも複数出てきている。いくつかの具体的な課題が洗い出され、整理された。これはいいことではないか、という話です。もちろんいいことです。しかし、功罪があるのではないのかなというふうにも思っています。

現地は踏んだり蹴ったり

ここ1年半で進んだ課題整理は、「功」のみかという、そうでもない。まず、「功」。課題整理のメリットとしては、課題解決へのリソースのスケールアップが図られるということです。リソースのスケールアップ。ちょっと難しい言葉を使って抽象度、一般度を上げていますけれども、要は事故の検証とか対策には政治的、経済的なリソースが入る。政治も活性化する、政治的な議論も活性化する。あるいは除染・賠償とか兆規模の予算がついて、賛否あると思いますけれども、少なくともリソースが集まっている状況がある。子どもの避難の問題、よく報道されたり、さまざまな社会運動が、NPO等々がその支援をしたりもしている。あるいは直近だとパブコメ・討論型世論調査みたいな新しい試みをやっている。こういう話もある。

しかし、一方で、「罪」、デメリットの部分もあるのではないか。そして、本日の話の結論になりますけれども、結局、福島あるいは震災の人たちに聞くと、この「罪」の部分が非常にみえてきてしまう気がするのです。福島にいて、事故の検証をしていただくのもありがたいけれども、それで福島がどうなるのかということ、必ずしもそうでもないような気がどこかでしてしまう。脱原発の話もいいけれども、それで福島の、あるいは被災地の復興にどうつながっていくのかということ、なかなかみえないところがある。たぶん、洗い出されないような瑣末な課題が解決されぬままに、この混沌から、具体的な細かい問題が洗い出された

結果、忘却されていってしまうような部分というのがあるのではないかと思います。

実際、現地に行くと、「何でこんなに進まないんだ、雰囲気だけ震災前みたいになって」みたいな言葉が出てくる。「テレビじゃ、おれらの生活の細かいことはやってくれない。新聞をみても、除染・補償ばっか、その話しか出てこない」みたいな言葉を聞きます。

彼らのニーズが何なのかとか、その問題はニーズをどう満たしていくのか、というような議論が、もちろん試みられているわけですが、どうしても足りないような状況があるのではないかなと思います。

3.11 が明らかにした課題は、「原発」「放射線」だけではない。外からみていたら、それを描く側としては、原発とか放射線というところに集中してしまう意識は非常にわかりますけれども、地方からしたら、高齢化した地域が産業を失ってしまうような状況がある、産業に打撃がある、生活のインフラが麻痺してしまっている、それをどうするか、地方の行政、ガバナンスがずたずたになっているということがわかった。そして、震災後、なおさらそうなっている。では、それをどうするか。あるいは地域の医療、福祉のインフラがもとから悪いけれども、もっと悪くなった。それをどうするかというような、例えばそういった問題がなかなか議論されていないではないのか、ということです。

もう少しこの話を深めると、被災地を回って聞く言葉は、こんな言葉です。「若い人が出て行ってしまう」、「産業が衰え雇用が不安定になる」、「家族が、コミュニティが崩壊している」、「ネガティブなイメージがついて人がよってこない」。

ですが、これは震災によって起こったことなのか、というふうに一歩冷静に考えてみると、そうでもない。3.11 後に起こった問題なのか。いやいや、実は3.11 前から相当深刻に進んでいた問題だというふうにとらえることができるわけです。そして、もちろん震災が関係ないことはないわけです。震災が、これをむしろよりわかりやすく、先鋭化する形で私たちにはっきりとこの問題を突きつけたというわけです。

たぶん、「日本の地域社会の多くが、長い間抱え続け、今も苦心する問題そのもの！」が、いまの状況の中で原発立地地域のみならず、より広い形で問題として表出しているのではないのかなと思います。そして、それこそが、私が「地方の原子カムラ」と呼んだような、それがなければこ

の地域はやっていけない、だから、それにどんどん依存していってしまう、中毒状態になるような状況というのができていってしまったのではないか。この構造は、たぶん、震災前よりも後のほうがより深く問題化しているのではないか、というふうに思うわけです。

「原発問題」が消費された1年

3.11の直後は、「3.11によって日本は変わった」、これから変わらなければならないという話が盛んにされましたけれども、必ずしもそうではない。そういった見方ももちろん必要ですけれども、むしろ3.11が日本を変えたのではなく、それまで静かにそこにあった問題が、あたかもリトマス試験紙のごとく、震災によって明らかに可視化、意識化された、というとらえ方が必要なのではないか、というふうに思っています。

いま内側からみえる風景、眼差しを申しました、しかし、外から聞こえてくる声、外の方と接したときとか、あるいはメディアをみていて、どういうふうに感じているかということ、例えばこんなふうに感じているということを知ります。

「ものすごい大変なことになっているらしい、被災地は」、あるいは「もう大丈夫だという情報があって、それは自分の中でつなげて理解したつもりになっている」、これは都会の方が言うわけです。どうしても現場の細かい状況というのが、時間がたつにつれて、問題が整理されてしまうことによって、結果的に両極端に触れてしまうわけです。そして、3.11は、たぶん本当の問題は、この両極端の間、真ん中にあるはずなのにもかかわらず、そこは議論されずに、ものすごい大変だとなるか、いや、もう大丈夫なんじゃないか、というところへ忘却されてしまうのではないかということなのです。

たぶん、これはアカデミズムもそうですし、さまざま、いまはソーシャルメディア等も発展していますから、情報を発信する方みんなの問題ですけれども、中央の側から、あるいは外側から3.11や原発の問題を「消費」することだけをしてきてしまった1年間なのだとしたら、非常に残念だと思われるわけです。地方の側で起こっていることにどれだけ目を向けられたのか。1年半たって、何を「生産」できたのか、あるいは今後「生産」できていくのか、という視点がたぶん重要になっていくのではないかなと思います。

「消費」する。効率が悪いという話とか、こんな悲劇があった、こんなひどい話があった、まあ

いい話があったを含めて、という話は盛んに出てくるけれども、悲劇があったらどうしましょう、こんなひどい問題があった、じゃ、それをどう改善していきましょうという話がなかなか出てこないように内側からはみえているのかもしれない、というふうに思っております。

また、「忘却のループ」というのがいまどうなっているのか。ここにあった問題が解決されているのか、忘却されているのか、これはもちろん解決されている問題もありますけれども、たぶんそうでない問題もあるのではないかというふうに思っております。

また、少し話を変えますけれども、3.11から1年のタイミングで、それこそ消費がされたわけです。別にそれ自体は悪いことではありません。震災・原発関連書籍の刊行数が600~800あった、いろんな数字のとり方によって変わりますけれども、そんなふうに言われています。「原発けしからん」という話とか「こんなエピソードありました」と、多様な話が出ています。テレビの特番等もありましたけれども、報道がその後一気に減っていくような状況があった。

ここ数カ月をみると、例えばこういう傾向があるのではないかと思っております。『社会を変えるには』、小熊英二さん、いまデモのことで頑張っている、反貧困で有名な湯浅さんは、『世界は変わらない』という話を書いています。あるいは與那覇潤さんは『変わらない日本人』みたいなことを書いていますけれども、こういった、どこかで「変わらぬ日本社会」みたいなものがブームになっているのではないかと思います。

日本人は変わらないのか？

これは別に口裏を合わせたわけではなく、私自身もいま本をつくっています。このタイトルも、全くの偶然なんですけれども、『「日本の変わらなさ」との闘い』というふうに副題を入れています。私は、ずっと何も変わっていないと、最初の書籍の表紙にも書いたくらい、震災直後から言い続けてまいりました。我田引水かもしれませんけれども、社会的に3.11であんなにひどいことになった、あんなに衝撃があった、でも、案外変わっていないよね。これって、結構やばいことなんじゃないか、というような社会的な無意識が皆さんの中に実は共有されているのではないかな、というふうにも感じるところです。特に書籍の編集者は、そういう社会的に実はみんな言語化できて

いないけど、こうじゃないかと思っっているようなことをねらっていったりもします。

たぶん、この「変わっていない感」というのがどこに行くのか。それは毎週金曜日のデモかもしれないし、政権が変わること、政局の問題なのかもしれないし、あるいはまた別な要因なのかもしれません。しかし、こういった「変わっていない感」の行方というのもみていく必要もあるのではないかなということを書いておきます。

ここから福島の実況について、もう少し具体的なケースに入ってまいりたいと思います。

私は福島大学で5月から活動していますけれども、所属しているところは、福島大学のうつくしまふくしま未来支援センターという、震災後にそれこそ復興関係を専門にやる部署としてつくられたところですよ。

先ほど、課題整理の功罪と言っておいて、こういうことを申してしまうのは、矛盾しているように思いますが、こういった課題を設定し、それぞれに担当者がついて、この部署をやっています。これは大学もそうですし、恐らく行政や市民運動、市民会、NPOなどもこういったテーマを設定しながら活動しているところが多いのではないかなと思います。

大学の場合は、特に一番話題になったこととしては、例えば双葉八町村の全世帯を対象にした住民調査、アンケートをやったりしています。昨年、新聞等でも公表されたので、ご記憶のある方もいるかと思いますが。大学という、ある種、中立的な立場だから、行政とも違う、国とも違う、政治家とも違うところでやっていたりもします。この中で私は地域復興支援ということで、住民の方の生活をどういうふうに考えていくかということを担当しております。

この調査は去年から続けていたことですので、いくつか事例をみてまいりたいと思います。

例えば避難の問題、子どもとか女性の避難とか、放射線対策の状況はどうなっているかということです。これは外からみたら非常に目立つ問題ですよけれども、確かに非常に気を使う住民の方も多し。しかし、一方で、事実をみれば、急激な人口の減少傾向は落ちついております。これも避難先として新潟が最初メインだった。結構浜通り、海側の方が新潟に行く傾向がありました。この傾向がなぜかという、新潟が中越沖地震等で多くの被災者の方の受入態勢を実は事前に整えていたということもあります。あとは、原発がそこにあるから、もともと縁故があった、あそこならなれ

た土地なので家族で行くような方も多くいた、というような状況がありました。

しかし、これがまた去年のいまごろの夏休みころから、いろいろ状況が変わってくるわけです。今度、山形が避難先として非常に多くなっています。これは中通り、福島市とか郡山市とか、線量が比較的高いといわれるところのご家庭がおそらく多く避難している。山形ですと、高速道路を使って1時間から2時間ぐらいで家に帰れる状況ですので、そういったところに行く。

だから、単純にみんながみんな避難しているとか、怖がっているというわけではなくて、たぶんそのときそのときの状況で問題の内容も、質も量も変わってきているということは把握しておくべきことだと思います。

むしろ人口増加現象もあつたりします。これは特に浜通り、いわき市など、こういうことを学校の先生とか塾の先生とかがおっしゃっていますが、「避難したけど、だんだん子どもが青くなって、戻っていった」という話とか、高校は地元の進学校に行きたいと。小学校、中学校ぐらいまでは子どものことが気になるけど、高校生ならいいでしょうみたいな、微妙な意識差、年齢による違う傾向みたいなものも出てきていたりします。その中には、当然、妻と夫、あるいは嫁・姑問題みたいなものも出ています。そういった意識差もあります。その点はいろいろなところで報道されているので、ご承知の方も多しと思いますので、詳しくは申しません。

地方選では原発の争点は少しも

もう1つ、事例の2つ目は、「原発・放射線への意識」についてです。福島は県を挙げて脱原発をしているという見方があります。これは事実ではありませんけれども、事実でない。必ずしもそうも言い切れないところもあつて、これもまた非常に重層的な問題なのです。おそらく大きな県民世論としては、「原発なんかこりごりだ」、こんなにひどい事故があったから、二度とこんなことはないほうがいい、ということは間違いないでしょう。そして、現知事も、県内の原発全機を廃炉にする、あるいは再生可能エネルギーを促進する、というようなことを表明しています。

しかし、いろんな細かい事例をみていくと、必ずしも一筋縄にそう言える状況かということ、そうでもない。例えば福島県議選挙が去年の11月にありましたけれども、そのときに、福島市からはずっと震災前から脱原発を掲げていた方が出た

わけです。これはいくのではないかと、思ったら、最下位になるわけです。この話は、詳しく言うと、いろいろ細かい話が出てきてしまうのですが、一番のポイントだけ言うと、このとき、議会の中で、全員議会在が脱原発を掲げた。保守も革新もです。つまり、争点外しをしたわけです。もちろん気持ち的には原発はないほうがいい、原発にはこりごりと思っっているけれども、もとから信頼している人に入れるとか、あるいはいまの問題というのは原発云々ではないでしょう、除染とか補償とか、あるいは産業復興をどうしていくかという話でしょう、というような、現実的と言っていいかはわかりませんが、どこかでそういった意識が働くような状況になっている。

「大飯再稼働反対決議」は、福島市とか、いわき市、大きいところと言うとそういった自治体でも否決されているわけです。これもいろいろ議会の中での力関係、組合が入っているとか、あるいはそういった問題を議論している場合ではない、というような話もあったりします。

「再生可能エネルギー」についても、これは私も以前から申していることですし、主張としては、住民の方からもそういったことが出てくる。原発と同じ構造になってしまうのではないかと、というような意識が、再生可能エネルギーについても持つ方がいたりします。つまり、外から巨大な資本が来て、ガンと大きな箱物をつくって、出て行って、これから再生可能エネルギーはイノベーションが起こっていくだろう、だから、この大きな機械もいつか使えなくなってしまうだろうというような話です。それだったら、たぶん高度経済成長期の、箱物をつくって維持費だけかかって意味がなかった、というような構造を実は反復してしまうのではないかと。それこそ「2つの原子カムラ」みたいなものを、もう一回、「新エネルギーカムラ」みたいなものができてしまうのではないかと、というような懸念、あるいは実例も出てきているような状況であります。

ですので、原発とか放射線というものも、実は一口で言える状況ではないということです。

3つ目は、産業です。福島は農業も漁業も終わっているというような空気が、少なくとも去年のいまごろはあったかもしれません。確かに放射性物質の検出とか出荷停止はありました。あるいは観光業へのいわゆる風評被害とかも大きい。閉じる温泉宿とか、あるいは海水浴客、ことし福島県の一番南側の海水浴場である勿来というところがありますけれども、その海水浴客は例年の通常営業時の4%だった。しかし、1年たってみて、

じゃ、終わっているのかということ、必ずしもそうではない。努力のしようがあるということがわかってきていたりします。

農業だと、「きのこ・竹の子・山菜」みたいな、非常に線量を吸うらしいものと、必ずしもそうではない葉物とか果物とかが意外と区別されているということです。

漁業も、必ずしもみんな近海でとっているわけではなかったわけです。かつおは八丈島のほうに行っってとったり、さんまは北海道のほうに行っってとったりして、いわきや相馬のほうの港に入ってくる。あるいは、伝統的に水産加工業、かまぼこが実は震災前は日本で一番板かまぼこをつくるのはいわき市だったりしたのですけれども、そういったものも、結局、原料は必ずしも近海でとってくるものではなくて、輸入品だったりしますから、意外と再開していたりもします。

あるいは、お酒とかは、去年さんざんいろんな飲み屋へ行っって復興フェアとかをやっていた記憶もある方もいると思いますけれども、むしろ例年と同じか、それよりも上がったと言っっているような方もいます。そもそも日本酒の消費量が減っっているような状況があっって、その中でも福島県のお酒というのは全国的に注目されていたかということ、必ずしもそうではないけれども、復興フェアなどで注目していただいたおかげで、むしろ好影響が出ているというような話もあります。

ですので、農業とか漁業も、単純に終わっって、何かもう絶望的だという話なのかということ、必ずしもそうではないということです。

「一周まわって御用学者」現象も

いま、事実、事例をしゃべってまいりました。ここからはもう少し理屈の話になってしまっすけれども、こういったことを1つ1つとらえていくと、一言で言えないということが結論になってくるわけです。そして、事実を語ること自体が実は非常に難しかったりします。

1つ目、現実には極めて重層的で、重層的にもかかわらず、あるいは重層的であるがゆえに事実を語ることを目指すほど言葉足らずになってしまっす。事実を言うとき、私のいまのような話を聞いて、「おまえは安全だと言うのか」という安全論、危険論論争みたいなものが始まっしてしまったり、あるいは「これが減っていますよ」と言ったら、「風評被害を助長するのか」といった話になってしまっす。事実を言うこと自体が非常に難しいわけなんです。

その結果、外からは中立的な話が出てくる。これは県内外、被災地内外、また同じようなところでしょうけれども、こういった事実を語ることで体が難しい。だから、中立的なような情報がまず出るけれども、どこかでそこにリスク・危険があるけど、そこは自己責任だよ、みたいなメタ情報をつけられるような描かれ方がしているのではないかということ。

そして、それに地元の方が対抗しようとするかどうか。私もできるだけ安全なものは安全であると、ポジティブに向かっているものはポジティブに向かっているというふうに申したいと思いますけれども、そういう気持ちはどうしても空回りしてしまうような状況があります。これを私、「一周まわって御用学者問題」というふうに言いますが、例えば地元で発言を求められる人、地元の財界の方とか、学校の元先生とか宗教者とか、講演とかを聞きに行くと、結構この話のパターンが多いなと気づいたのです。私の印象論かもしれませんが、まず「震災ひどい、原発事故はうんざりだ」という話をひとしきりするのですが、「でもね、これはめちゃくちゃチェックしててね。いま農作物はND（不検出）だ」とか、「除染もしっかりしているね」みたいな、福島をよき方向にという思いがあって、安全みたいな話を始める。しかし、外からみると、さも安全論者が風評被害を無理やり消そうとしているかのようなイメージを持たれてしまって、パッシングを受けたりするようなことも出ているということです。

こういった問題と常にある事例を、「小春ちゃん問題」と呼んでおりますけれども、ここでお話しします。2011年6月ごろに、あるところで聞いた話です。小春ちゃんという幼児とお母さんが避難した。小春ちゃんのお父さんが「ほんの少しの間行ってくればいい」ぐらいの感覚で、それで気持ちが楽になればね、みたいなことを言って、お母さんと小春ちゃんも——小春ちゃんはそういう意思があるかわからないですけども——お母さんはそういう感じだった。その当時、既に分断とか人と人の亀裂とかということが、報道するうえでの、描くうえでのキーワードになっているような時期でした。やってきた全国紙の記者の方は、小春ちゃんのお父さんに聞きました。「お子さんと奥さんが遠く離れて辛いですね」、「まあ、そうですね」と。「娘さんの名は?」、「小春と言います」。「いつか明るい春が来てほしい」という思いでつけた名前ですよ」と誘導尋問しているわけです。気持ちはすごいわかるんですけども、

重要なのは、人それぞれ、悲劇にも喜劇にも希望にもグラデーションがあるということ、描くときにどこかで切り捨ててしまうのではないかという話です。「別離の悲劇」と「ささやかな希望」という落ちありきな話があり、一方で、「一周まわって御用学者」みたいに言ってしまう。「現地は悲劇であふれていますよ」みたいな話と、「いやいや、全然大丈夫なんですよ」みたいな、不毛な対立構造ができてしまう。

その結果、住民はどういうふうになってくるか。また別な事例を挙げていますけれども、2012年3月、半年ぐらい前です。会津若松市で避難者支援をするNPOのスタッフの方から聞いたエピソードです。新しいボランティアスタッフがそのNPOに来て、住民の方にいろいろ話しかけて、「生活はどうですか」と聞いた。すると避難者の方が、「生活はどうですか」の一言目に、「普通に生活しています!」と激怒するという事例があったという。これは想像できる方と、できない方、現地へ行かれた方はたぶんわかると思いますけれども、さんざん「大変ですよ。避難して1年たってどうですか」と聞かれ続けているわけです。

理由は、こちらで推測するしかありません。この方がたまたまこのとき不機嫌だったのか、センセーショナルリズムの押しつけだったのかもしれないですけども、怒ってしまった。

これに対してボランティアの方は、裏でスタッフと一緒に、「あの人たち、原発の恩恵を受けていた人たちなのに……」とつぶやいたというのです。やっぱり理解できない状況を、理解しようとするということというのは非常に難しいと思うのです。その内実というのは、どう踏み込んでも、どう言葉にしてもらっても、とらえ切れないような問題がある。そして被災者とか弱者というものを、被災者とか弱者の枠の中に縛りつけてしまうようなことが、どこかで起こっているのだとすれば、それもまた、こちらもそれを描くことによってどうにか社会をよくしたいと思っても、そうならないのは非常に残念なことなのかもしれないと思います。

被災地をみる眼差しの重要性

私がいろいろ事例を挙げながら、結局「眼差し方」の話をしてまいりました。この問題は非常に重要だと思っています。

去年のいまごろ、もうちょっと春先でしたけれども、福島の農家の方が何人も自殺されました。誰が「殺した」のか。ちょっと刺激的な問いにな

ってしまいますけれども、そういうふうを考えていくと、難しい言葉を使う必要はないですけれども、「存在論のレベル」、そこにあるものは自殺です。ただの自殺。ですが、おそらく、この農家を殺したのは、「福島の農業は死んだ」か、「福島は終わった、被災地はもう農業なんかやる必要はない」か、あるいは「家なんか、もう帰れないんだ」という話、「農作物なんかつくるな」という話ですね。それはたぶん外からの眼差しが殺したというふうに言うこともできるというか、たぶんそうなのですね。

そして、それはおそらく善意から出ているということも、この問題の厄介なところだったりもするわけです。理解できるのもたぶん、安易に理解できないからこそ押さえ込みたい、断定したいという気持ちが私たちの中に、それは情報を送る側にも、受け取る側にもあると思います。けれども、その暴力性というものに自覚的にならないといけないというふうに、現地を歩きながら私自身は常に自問自答自省しているところです。

もう少し具体的な話をしながら締めてまいりたいと思います。

いますべきことは、一言、単純にデータをとるということをやめていくことだと思っています。描くことが非常に難しいけれども、データをとるということに集中する。その中で答えをみつけていくということしかないと思っています。根本的な解決になるかはわかりませんが、いま挙げてきたような事例は、あえて質的なデータです。量的なものではない。こういうふうに考えている人は何%ですよ、みたいな話をしないでまいりました。先ほど、八カ町村調査という、最大規模のアンケートの結果が新聞に出たときに、一番見出しになったのが何だったかという、「双葉地方の人は何割が帰りたくないと思っています」という話でした。それが出てしまうと、地元の方はどう思うか。3、4割の人は帰りたくないと思っているかもしれないけれども、残りの人はやっぱり帰れるのならば帰りたいたいと思っているにもかかわらず、こういうふうに、みんな帰りたくないんだ、みんな絶望しているんだ、という描き方をされてしまうと、自分自身が取り残されて、あるいは自分自身が変なことを思っているかのように思って、孤独感を感じてしまう、というふうに関心おっしゃる方もいますし、そこら辺は非常に慎重にしなければならないわけです。

たぶん、量的なデータもいろいろ出回っていますが、もうちょっと質的なデータも、量的なデータも、たぶんまだ出揃っていない部分があ

ります。そのデータをいかに出揃わせていくかということです。そして、現状が、どうしてもあまりにも質的な印象論とか、「前提ありき」の論が流布しているのではないのかなというふうに思います。先ほど出した3つの事例も、そうなのです。みんな避難したがっているのではないのか、もう産業はだめなんじゃないのか、そういった話をずっとしていても仕方がなくて、いかにそこからよい方向に向けていくかということを議論するためのデータが必要になってくるのかなと思っています。

「今すべきなのは、『べき』と『である』の区別」です。これは哲学とか、人文社会科学の中ではずっと、古代から問われてきた「べき」と「である」の区別という話なのですが、難しいことではありません。やっぱり「べき」と「である」を区別しないと、どこかで私たちは混同してしまうところがあるのではないのかなということです。

これは「安全神話」も「過剰な問題化」も同じです。安全であるべきだ、そうに違いない、というふうに関心神話をつくる、原発を推進するという意志を持った方が、どこかで安全であるべきだという価値を、いつの間にか「安全ですよ」という「事実?化」、「である化」してしまったところが、いわゆる「安全神話」をつくってしまったのではないかと。

逆も同じですね。被災地はとんでもないことになっている。だから、とんでもないことにしやがった権力けしからん、みたいな価値があると、それ自体、別にいいことですが、だからといって「被災地はとんでもないですよ」と言い続ければ何か事態がいい方向に行くかという、むしろ、ここまで申してきたような問題が起こってしまうかもしれません。

ひたすらデータを集める大切さ

例えば、データとして、人口減少も4%弱で、福島県は1年たってみて、横ばいになってきております。ここで重要なのは、やはり先ほどと同じ話になってしまいますけれども、もともと人口減少傾向が激しい地域、地方であったということです。これは日本のどこの地方でもそうですけれども、それも大体5年間で3%ぐらいいは減るような傾向はもともとあった。それがたまたま1年間で起こってしまった。もちろんそれは原発事故が、震災が一番大きな要因ではあるけれども、では、その話だけしていればいいのかというと、必ずしもそうではないわけですね。

あるいは、離婚率とか自殺率とか、子どもの死亡率とかというのは、下がっていない。離婚率や自殺率などのデータも出てきている。甲状腺、直近で出ましたけれども、これももちろん異常なのか正常なのかわからないけれども、とりあえずいまはひたすらデータをとっていく。そして、そこから判断していく、次の策に冷静につなげていく、ということが重要なのかなと思います。

もう一点、現地にある課題解決を優先させていくということが、いま重要ななと思っております。先ほど申したような、大きな、マクロの、お上の話、こういう政策がいい、こういう政局がいいということも重要ですけども、たぶん、現地にある、被災地にある課題を解決していくことが重要だというふうに思っています。

もちろん、現地が大丈夫か大丈夫じゃないかという、必ずしも大丈夫ではないということは間違いありません。しかし、それは3.11のみによるものでもないということですね。少子高齢化、産業衰退、医療・福祉、ガバナンス、科学的リスクの発露。日本は課題先進国であるというふうに、偉い方たちが言ったりしています。その課題、これは被災地に詰まっているわけですね。たぶん、日本が売りにするべき課題の最先端として被災地をとらえることもできるでしょう。

もう1つ、最近リスク管理とか、リスクの話、リスクをどう考えていたのか、みたいな話がされます。それはもちろん重要です。ちょっと細かい話は飛ばしますけれども、もちろんリスク管理、予防していくことも重要ですけども、たぶん、いま重要なのは、それをどう治療していくかという話。それが、まだなかなかされていないんじゃないかと。先ほど挙げたような地方の問題は、もう一発逆転はありません。一発逆転しようとするとうつ原発を呼んでしまったり、リゾート開発をして失敗してしまったり、工場を呼んで何百人を雇用できたけれども、円高になって一瞬で失業者何百人の地域になっちゃったみたいな状況がある。たぶん、いま重要なのは目の前の困難をどう抜け出すかという、一発逆転ではなくて、細かくバントでつなぎながら、アウトをとられないように点数を入れていくという話なのかなと思っております。

時間が来ておりますので、いろいろ資料に書いた部分の、一点だけ触れます。「だけれども」から「だからこそ」へというところ。それはメディアもそうですし、アカデミズムもそうですし、あるいは私は最近、内閣府がいま福島県で雇用とか創業を勧めようということで、ビジネスプランコンテストをやっていたりして、その審査員として

行くと、「こんなことになっちゃったんだけどでも頑張ります」というような話なのですね。ですが、たぶん重要なのは、こんなことになっちゃったからこそ、それをどうしていくかという話だと思うんですね。それはいま申ししたような「課題先進国」の、最先端の課題がある土地である福島で何かやりませんかという話。ほかの被災地でも何かやりませんかという話なのかもしれません。細かい話はいろいろあります。

ネガティブをプラス化する発想

例えば、今週出ている「週刊プレイボーイ」で、哲学者の東浩紀さんが、「福島第一原発観光地化計画」と言っています。これだけ聞けば波紋を呼ぶような内容かもしれませんが。不謹慎だと言うかもしれませんが。でも、私は、こういう議論をしていくべきだというふうに思っております。ご承知の方も多いと思いますけれども、広島原爆ドームも、最初、つぶしてしまおうと。あれだけの負のものを消して、もう一回ゼロからやり直そうという話もあった。そのままほうっておこうという話もあったし、固めてずっとあそこを人が訪れるようなシンボルにしていこうというような議論があった。結果として、一番最後のものが選ばれたような歴史があります。

たぶん、こういったネガティブだけでも、それを消してゼロから頑張りますじゃなくて、ネガティブだからこそ、それをむしろ人類の知の拠点として、この地域のアイデンティティーとして新しい状況をつくっていくというような話というのは、意外と地元の人たちは嫌がる話でもないというふうに思っております。

例えば、南相馬でも、瓦れきの問題、ご存じの方とご存じでない方で分かれるんですけども、南相馬が瓦れきを受け入れるというか、それをもとに新しい防波堤を、希望の防波堤をつくっていくみたいな話をしていますね。桜井勝延市長が非常にアイデアのある方で、いろんなことをチャレンジする方なので、そういうことをやっています。このネガティブな状況を見ない振りをするとか、弱者のままに固定する、被災者のままに固定するというのではなくて、そこから次、どういう方向に進んでいこうということが、いま、議論されるべきなんじゃないのかなというふうに思っております。

最後に書いてある「間—当事者性」という言葉で私は言いあらわしていますけれども、当事者にはなれない、なれないけれども当事者につながっ

ていく。他者のままだと、あいつ悪い、こういう悲劇があるという描き方として終わってしまうけれども、そうではなくて、当事者が何をやりたいのか、「いや、当事者にこういう提案ができるぞ」というようなことを考えていく必要が、いまそこにかかわろうとする人の中で求められているのかなというふうに思います。

《質疑応答》

司会 ありがとうございます。40～50分話されたのですが、非常に中身の濃い話で、ちょっと私には、これをうまく全体をまとめる力はありません。ただ、総論として、やはり自ら原発を抱いてこれまで来た地域は、これからも、民主的に原子力を再選択していくプロセスが進行しているということとか、10年ごとの大事故を、すぐ我々が忘れてしまうという「忘却のループ」。これはバブルとか、そういったものにも共通すると思うんですけども、こういう視点ですね。

総論プラスアルファで、具体的な事例についても各論的にデータも入れて、いろいろおっしゃっていただき、最後に1つ、いますべきことについてのいくつかのご提案をいただきました。それぞれの項目について非常に、相当抽象的といいますか、高度に抽象的な、あるいは新しい1つのコンセプトとしての切れ味のいいワーディングがあちこちにあるので、どこからついていけばいいのか。なかなか質問は難しいですけども、きょうは、現場の方々もいっぱい来ていらっしゃるの、ぜひ事実関係についても、あるいは見立てについてでもいいですから、どんどん質問していただいて、そのやりとりの中で新しい1つのファクトファインディングなり、議論を高めていけるようなことができればいいという視点で、最初の講演を運営していきたいと思います。では、皆さんの中で、ご質問ある方はどうぞ。

質問 少し離れるんですが、この夏、話題になったことに、政府事故調と国会事故調の報告があります。この2つの報告を開沼先生はどのように評価されるか。特に政府事故調は、初めから責任を追求しないということを前提としてやったのでありますが、その辺はどのようにお考えになるか、お聞かせいただきたいと思います。

4 事故報告書の比較研究を

開沼 まず専門家でも——事故調の専門家が

いるかはわかりませんが、そんなに専門的に読んでいるわけでもありませんけれども、まあ民間事故調もかかわらせていただきながらの視点で申しますと、いまおっしゃったような責任追求をするか、しないか。そもそも、事故調ができたプロセス。政府事故調をつくったら、それでは追求が甘くなるだろうということで、自民党の中の方から、国会事故調をカウンターとしてつくろうというような動きがあったというのが、そもそものプロセスだと思います。

そして、結果として出てきたものをみると、そういった目的、そういった対抗軸みたいなものができていたのではないのかなというふうに思います。人災であるというふうに言うとか、あるいは実は津波以前に、地震によってそもそも障害が起こっていたのではないかというようなことを指摘する国会事故調と、もうちょっとディテールをみていくような政府事故調みたいな、対立軸がみえたのはよかったなというふうに思います。

ただ、民間事故調もそうですが、問題は、ほかにもやっぱり、どうしても期限もそうですし、予算も人員も、そもそも足りていなかった。もうちょっとあったらよかったのかなというふうにも思いますけれども、では具体的に、先ほど申ししたように、これを危機管理として次に生かしていけるのか。本当の危機管理といっても、たぶん、何の想定もしていないところにこれだけの大きな問題が起こるといえるときに、この具体的な問題をもうちょっと抽象化してどう生かしていけるのか、というようなところまで落とし込めたら、もっと国にとっても、そこでいろいろな事業をやる方にとっても、意義があるものになったのかなと思っております。

ただ、そこについては、いま実際、東電事故調も含めて、大きなもので4つありますから、それを比較研究するような、二次資料として、二次的に研究をしていくようなやり方というものもあると思いますし、もう少し発展をさせていく必要性、余地というものはあるのではないかと思います。

質問 新潟日報の記者です。新潟の柏崎の話が出てきて、いらっしゃったということで、その補足も含めて、我々の考えと、意見の相違がある点、ちょっとお聞きしたいなと思った点がありまして。

1点、選挙。まず2011年、3.11以後に行われた県議選の結果なんですけれども、見ていただく

とあれなんです、確かに脱原発の候補が落選しているんですが、三富佳一という自民党の現職の方は、7~8期やられていて、自民党県連会長もやられた、県政会の長老なんですね。武本さんという方は、地元で脱原発の活動をやられてきた方なんです、選挙戦当日に出馬を決断されて、特に組織的な、そういう自民党の組織力を相手に、自民党の長老に対して1,500票差まで迫ったというのは、地元では非常に大きな変化だというふうに受けとめています。

あと、「原子力つけめん」の話なんですけれども、きょうは直近に柏崎支局にいた人間も来いますので、確認したところ、「原子力つけめん」も、「原子力」という名前をとって、「つけめん」になったそうです。(笑)

我々、新潟にいる人間から見ると、さすがに3.11という、あの原発が2つもボンボンと爆発してしまうシーンを目の当たりにして変わらないわけがなくて、いままで何十年とわたって強固につくりあげてきた原子力依存の社会の立地地域のシステムというか、物の考え方というのが、選挙戦を通じてなり、日ごろの、何しろ柏崎の再稼働にはまだみんな反対しているわけで、認めていないわけで、原発は動かさないというのが、新潟県知事初めの意思になっている。非常に変わってきているんじゃないかと思うんですが、それでもやっぱり、外からみられると、原発立地地域というのは変わってないなというふうにみられてしまうのかなという、そこがすごくもどかしさを感じる部分であるんですが、その点、こういった考え方のギャップについて、いかがお考えになりますか。

原発村の地域差研究も課題

開沼 おっしゃることもごもっとどだと思います。出てきている事実を、とはいえ東京の人からみたら、「え、あの4月10日の時点で？」という話もあるし、おっしゃるような地域のガチガチの構造があって、そこに風穴があいたという見方も当然できる。それはたぶん、両方、それこそ重層的なものを単純化してしまうデメリットみたいなものもあるのかなというふうに思います。

というところと、あと、新潟の特殊性、あるいは東海村等もそうですけれども、もともと、それこそ武本さんもそうですけれども、新潟の場合は非常に反対運動が強かった。東海村はJCOの話があって、やっぱり原発なき地域社会というものどうあるかというような議論を10年前から続け

ていた。そのような土壌があったところは、東海村の場合は首長さんが脱原発だと、いろんなところでしゃべっていらっしやいますけれども、たぶんそういった土壌がないところ、北陸とか、青森とか、それこそまだまだガチガチだったりもするわけですね。そういった差異はもちろんそれぞれの地域によってあると思います。ただ、研究すべきなのは、そういった差異をより広くみて、何が、原発がなくてもその地域が依存的にならずにやっていたらいいのか、というような研究・調査・取材もされていくべきかなというふうには思っておりますので、おっしゃる問題意識、非常に共感いたします。

質問 新潟日報の記者で、柏崎にいた者です。

「自ら原子力を求めにくる原発立地地域」という話があるんですけれども、我々、立地地域にいる者からすると、東京や首都圏の人たち、電力がどこでつくられているかというのは、非常に意識が薄いという感覚がありまして、そういったものがこういった原子力モデルの維持につながっているんじゃないかという思いもあるんですが、その辺はどのようにお考えでしょうか。

開沼 おっしゃるとおりで、やっぱり3.11の昼までは、私たちにとっては、もう“社会的無意識”というふうに呼んでいますけれども、人間にも、個人の中にも無意識がありますけれども、たぶん社会の中にも無意識があるんですね。それは、先ほど申したように、基地の話なのかもしれないし、あるいは病気の話なのかもしれないし、何らかのリスクがあるけれども、何か起こらない限り全く痛くもかゆくもない、意識に上がってこないということがあるかと思います。

それは、科学技術が発展すればするほど、あるいは社会がより高度化、複雑化するほど、無意識の病気というのは、知らぬ間にシステムが勝手に動いてくれているから、普段は便利だ。でも、何か起こったらとんでもなく不便になるというようなことがあるんじゃないか。そういった社会的無意識の領域をよりみていく必要があると思いますし、そのうえで、たぶん重要なのは、この原発の事故から学ぶべきなのは、おっしゃるように、私は「中央と地方の意識差」というふうに呼んだり、いまのプレゼンの中では、「眼差し方」というふうに言ったりしますが、やはり外からみてみえないものがあるのにもかかわらず、とりあえず外からみてこうであると断定したり、

外からみようともしない、というような状況を改善していく必要があるのかなと思っております。

質問 最終処分場の話についての見立てをお伺いできればと思います。

マイケル・サンデル教授の新刊に、スイスの事例として、ある村が、調査したら 51%が最終処分場を受け入れると答えた。けれども、年間数 10 万、お金を配るから受け入れるかと言われたら、かえってそれが半分の 25%ぐらいに減ってしまったという話があります。3.11後の日本で、公共心によって最終処分場を受け入れるような可能性はあるのかということと、もしインフラなり補助金なりがあれば受け入れるのか。最後に、もしそういうものが全くなければ、中間処分場もつくるんだから、全国の廃棄物を福島が受け入れてしまえ、みたいな政治状況が考えられないかということについて見立てを伺えればと思います。

日本では最終処分場は無理か

開沼 私の全く個人的な感覚、印象論、見立てですけれども、公共心として、国をおもんぱかって、みたいなところで受け入れるような形というのは、こと原子力について、そのスイスの事例の詳細はわからないですけれども、難しいのではないのかなというふうに思っております。

フランスがあれだけ原発の依存度を高めてこれたというのは、細かいことはいろいろあると思いますけれどもざっくり言ってしまうと、官僚国家であると。ある面でトップダウンで強く押せるような国であった。対照的なドイツをみれば、どちらかというところでは、分権型社会のところでは、原発というのはガバナンスとしてうまくいけなかったというようなところがあったのかな、というふうには思っております。

つまり、あまり公共心的なものに頼るという中で原発が広まっていくというふうには思わないというところでは。

そのテーマを、『「フクシマ」論』にも相当書きましたけれども、では何で動くかということ、公共心ではなく、損得の話になると 25%に減るといふ話かと、いま伺いながら思いましたけれども、損得の話で、原発に限らなくて、迷惑施設みたいなものが配分されていくような状況にあるのではないかと、いうふうには思っております。実際、震災前に、高知県だったかと思いますが、東洋町に廃棄物の最終処分場をつくるというような話が、あるいは高知以外でも、さまざまところで

計画、あるいはその端緒となるような話が出たりはしていたことはありましたけれども、いずれも相当貧しい地域では、そうでもしない限りここはつぶれてしまうという中でそういった話が出てきていました。

長期的な見立てです。日本では、たぶん最終処分場、これ以上は無理、難しいと思います。おっしゃっていた福島は、もう住めないからね、という話とか、あるいは放射性廃棄物ではなくて、いわゆる瓦れきとか、除染した土とかの問題としても、どうしてもあそこの地域に持っていかざるを得ないのではないかという話が、いま議論に出ていると思います。それはいま、ある程度具体化しているとお伺い、可能性はあるのではないかと。

もう一点、これは対外的に、やはり経済の配分の話になったときに、経済格差がある、あるいはグローバル化が進んでいるという中で、対外的にそれを持っていってしまうという話が、たぶんこれから、先ほども申したように、先進国だけではなくて、これまで新興国と言われた国、途上国と言われた国も原子力を扱うアクターになってくる中で、「では、お金をもらえるならうちの国で受けますよ。土地は余っていますから」というような話は具体的に出てくると思います。

震災直前、震災間際までは、例えばモンゴルが最終処分地を受け入れるみたいな話も具体化していたという話があります。まあ、モンゴルだけでなく、より大きな流れとして、そういうリスクの資本による配分、これは社会学者のウルリヒ・ベックが、「リスク社会論」ということを言っています。これまではリスクというのはお金の問題じゃなかったけれども、これからは資本の問題になってくるという話をしています。貧しい者が富める者から、富と交換にリスクも引き受けるという話ですね。そういったことは、事実として近いうちに現実化するのかなというのを見立てです。

質問 開沼さんは、福島及び原子力ムラを事例にして、「日本の社会は変わっていない感」というご説明をされて、よくわかる説明なんですけれども、それと、日本社会が持っている、ほかの諸外国と比べて変わらない、なぜ日本人は変わらないのかという部分で何かご所見があれば、ということと、日本の歴史というか、近代の歴史の中で、変わった事例というの、どういうふうにお考えになっているのか、それがなぜ変わったのか。それと、いまのこの 3.11 と状況はどう違うのか、

その辺ちょっとご説明をお願いできればと思います。

開沼 これは、たぶんいろんな言い方ができますし、それぞれの立場で、意見も分かれるところだと思いますけれども、変わったか、変わっていないかという、たぶん社会は常に変わり続けているものだというふうに思います。けれども、重要なのは、この変わっているかどうかという、存在論的な、実際変わったかどうかというのではなくて、人々の認識の中で変わった感があるか、ということだと思います。

変化の軸は中間集団から個人化へ

言ってしまうと、55年体制というのは、いまから過去を振り返れば全然変わってない。ずっと自民党、一党独裁だった、みたいな見方もできる。でも、あれは党内で調整していて、あるいは野党と交流していてね、というような話もあるかもしれない。あれはあれですごい安定していたわけですね。つまり「変わっている感」、あるいは「変わるかもしれない感」というのが用意されていたことは確かなのかもしれませんが。

一方で、いま、どうやら疑似二大政党制っぽくなり得るのかなと、実際、一回政権も変わって見た中でも、なぜか変わっていない感があるというのは、55年体制と比べれば、一見矛盾しているように見える事実なわけです。これはいろんな説明の仕方があると思いますけれども、社会学では「個人化」という言葉があります。

個人化という言葉を出すときに、対象とされるのが、「中間集団」と呼ばれるものです。ご承知の方には非常に初歩的な説明になってしまうかもしれませんが、中間集団というのは、家族とか、会社とか、組合とか、業界団体とか、そういった共同体が個人の意思とかを、それぞれ本来個人の意思なんか全然ばらばらなはずなのに、それを集めながら、例えば組合はこういう方針でいこう、闘おう、それで社会を変えよう、ということとぶつけていって、ある程度社会を動かしていく。そうして中間集団がまとまることによって社会を動かしている実感というのを持つことができるようになったというのが、前近代、あるいは近代の初期の社会のあり方です。

しかし、社会が高度化していく、いわゆる“ポスト近代”なんていわれる——おそらく現代はポスト近代的な社会なのかもしれませんが——そういう中で、そういった個人が中間集団に

包摂される状況がどんどん崩れていく。それが個人化です。今のいわゆるポピュリズム的な政治なんて言われるのはまさにそうかもしれません。昔だったら組合をつくってとか、業界団体をつくって、あの候補に入れようと。そしてあの候補に言ったら、確かにうちの町に箱物ができたよ、みたいな、何となく変わっている感というのが担保されていたけれども、いまはそういう中間集団、受け皿がないわけです。という中でどうなるかというと、各個々人が、あたかも神様のような、カリスマのような人、本当にこの人は変えてくれる感というのを強烈に持っている人を支持する。そこに凝縮するというような状況ができていかなというふうに思っています。

それは1つは、橋下徹さんみたいな現象になるかもしれないし、デモみたいな現象になるのかもしれませんが。その行く先はどうなるかというのはわかりませんが、実は、一見、いまのデモに行っている人とか、橋下さんへ投票している人って、よしあしは別にして、すごい社会が変わっている感を常に高揚感として持っているのかもしれませんが、意外とそれによって根本的なところが変わっているのかということ、実は55年体制的な、一見、表面的には変わっていないけれども、中で、もうめちゃくちゃ調整しているほうが変わっているのかもしれない、という見方もできるかもしれません。

話がいろいろ堂々めぐりになってしまいましたけれども、たぶん、いまの状況の「変わっていない感」というのを解消する方法というのは、1つ前の55年体制的なモデルから新しいモデルにチェンジしていっているのかなと。だから、過去のほうが変わったというふうに、もしかしたら見えるのかなというふうに思っています。けれども、いまの状況というのは、たぶんまた別なところを模索している最中なのかなとも思います。

1つ目の大きな問いが、なぜ日本人は変わらないのかという話、日本は変わらないのかということでしたけれども、放っておいても変わるし、変わっているかどうかという意識が変わっているのかなというのが私の見方です。

質問 福島の人たちとメディアとの関係についてちょっと伺いたい。7月に私、福島市へ行って、いろいろ町を歩いてきましたが、例えば、自転車で行き交う知り合い同士が、「おい、このごろ高いなあ。先週から0.68だな」というような、数字が挨拶がわりになっている。これは当然放射

線量であります。

そうすると、このデータは皆さん地元のテレビや新聞で発表される数字をもとに、きょうは0.58、先週は0.68だった、というようなことを認識しておられて、そういう意味では地元のメディアを非常に信頼しているということのあらわれでもあるんだろうと思います。

先ほど、「忘却のループ」の中で、おそらくこれは中央メディアのことにしておっしゃったんだと思いますが、3.11 原発問題を情報としては消費しただけではないかというようなお話がございました。福島の方たちは、地元のメディア、それから中央のメディア、これをどういう距離感でみておられると思われませんか、その辺をお聞きしたい。

新たなフクシマ論が始まらないか？

開沼 これはもうずっと繰り返していることになってしまいますけれども、私が一人で代弁できるような話ではなくて、非常に多くの思いがあるとします。

中には、それは中央にというか、いろいろ原発に問題意識を持っている方に多いかもしれないですけども、メディアは全部電力会社から広告費もらっていて操られていてみたい、行政は全部隠ぺいしている、みたいな話で物を見る人も中にはいます。一方で、おっしゃるような、メディアのことはもう「ああそういうことなんだ」と思って、むしろそういった非日常的なところから意外と早いうちに日常に戻って、去年の4月、5月ぐらいの段階で、それこそ最初はマスクをしていたけれども、一生これでいくわけにはいかない、福島で自分は一生暮らしていくんだという人の中には、そのときから原発のこととか放射線のこととかは考えていないよと。メディアが大丈夫と言うから大丈夫だと思っているんだよ、という人も多い。例えば大きな駅の前に行けば、マスクをしている人なんか、風邪引いている人がいるぐらいの確率ではもちろんいますけれども、ほとんどいないです。去年の夏も、小学生、幼稚園児みたいな子どもが、タンクトップ、ランニングシャツで走り回っていたり、外のプールは入らなかったかもしれないですが、いろんなプールの道具を持って歩いていたりもする、というような状況があります。

それを「けしからん」とか、「危ないから、何でそんなことさせるんだ」という方もいますけれども、やっぱりそこで暮らしている、そういった

日常を送っている人がいる。じゃ、彼らに外の人間として、メディアとして、あるいは学者として何ができるかを提示していくのが、前向きという怒る人もいるんですけども、それがいまできる重要なことなのかなと思っています。

司会 では、最後、1つだけ私のほうから。先ほどの最終処分場の問題とも多少かかわってくるんですけども、福島のいまの現状は、原発誘致以前の状況に、ある意味では戻ってしまったともいえます。開沼さんの『「フクシマ」論』の中にあつた、過疎地域の発展の仕方として、原発という大きな力を持つものを誘致して過疎から脱却し、ある意味では1つの新しい地域発展というものを勝ち取った人たちがまた戻ってきて、以前は、原発というものがあつたから、あるところまで至ったわけですけども、いま、その手段は封じられている。では、簡単に言えば地域起こしというか、地域の発展、生活の種といったものを何でつくっていくのかといったときに、現時点ではまず考えにくいことではありますけれども、将来的に、いわゆる原発のごみ問題というものを解決することが、いわゆるバックエンド問題を産業化したときに、そういったものをむしろ積極的に受け入れて、それをコアにして、また新しい地域起こしをしていくような、そういう将来的な可能性。これは全くわからないことだし、あまり軽々に言うべきことじゃないと思うんですけども、その辺のちょっとした印象的な、イメージ的な話を伺えればありがたいと思いました。

開沼 福島で言うと、バックエンド問題にかかわっていくという、少なくとも現状までをみれば、そういう方向に進んでいるのかなというふうに思っています。よしあしはまた別にしてですけども。

というのは、震災前から、政府や電力会社と向き合ってきた、そういうカウンターパートと交渉しながら地域づくりをやってきたわけですね。それがずっと戦後の流れだった。震災後、では、誰かが助けに来てくれるかと思ったら、やっぱりカウンターパートは国と電力会社というのが、補償の話をとつても、あるいは戻る人がいるのであれば、新しい産業をつくってくれというのも、そういう状況があるわけです。構造はがっちりしています。福島以外の地域もそうでしょう。いま、政局の中で原発がどうなるかと、脱原発なのかどうかというのも全く予想はできません。いろんな転

び方をすると思いますけれども、では、それがなくなったらどうなるかという、それは北陸でも新潟でも、ほかの立地地域でもいいんですけども、やっぱりそこにほかの外のアクターが入っていかない限り、結局カウンターパートが、国とか東電とか関電とかになってしまったら、原発はないかもしれないけれども、同じような構造がつけられていく。それはバックエンドの問題なのか、自然エネルギーの問題なのか、何なのかはわからないですけれども、結局、先ほど申したようなり

スクと貧困が交換されるような社会の構造というのは変わらないだろうなと思います。

司会 ありがとうございます。では、開沼さんの講演はこれで終わらせていただきますが、このクラブで書いていただいた揮毫は「転換」、チェンジでした。では、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

(文責・編集部)